
淡雪の姫

わるいまほうつかい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡雪の姫

【ZPDF】

Z7789D

【作者名】

わるいまほうつかい

【あらすじ】

終わりを喪った永劫の旅路。そんな旅の中のとある1ページ。

淡雪の姫（1）

これは私、ルーツ＝エンブリオ＝ヘルロード＝タンタロス13世が、いつものように永久と黒騎士を供に、異世界を旅していた時のことである。

「あの~、疲れたのですが、休ませて下さいませんでしょうか？」

御者をしている黒騎士が、本日五回目になる嘆願を口にした。

「私はアルビノですし、永久もダンピール（人間と吸血鬼のハーフ）ですので、こうも日が照つていては、変わつてあげることが出来ないのです、すいませんね」

私は白々しく答えた。

「いえ、ですから、馬車を止めて休もうと……」

「早く街に着きたいので、却下です」

「…………」

と、黒騎士が、沈黙したところに、別の声が、割り込んだ。

「日が沈んだら、私が代わりましょうか？」

先ほど話題にあがつた永久である。

「夜になる頃には、街に着きますよ？」

「はい、分かりました ところで、馬は大丈夫なのですか？」

永久が、黒騎士と同じく、朝から全く休んでいない馬たちの心配をしてきたので。

「これを提供した、技術部の者によれば、遺伝子操作で改造した馬を、さらに選抜した馬なので、10日間不眠不休で走り続けても、大丈夫だそうですよ」

この馬がいかに頑強か説明した。

「そうですか？でも、たまには休ませてあげて下さいね？」

「うして私たちは、馬車を走らせ続け、夕暮れ時には、街に入る

ことが出来た。

日が暮れてから、宿に荷物と馬と黒騎士を預け 我々の馬が、何か赤黒い物を貪り食つていたような気がしたが……考えないことにじよつ 街へ繰り出したのだが……。

「ふむ、妾以外の白子を見るのは、初めてじゃのう」
……なぜか、私は十代半ば程の古風な物言いの少女 髪や肌が白いところから見て、私と同じ、アルビノだろう にじつくりと観察されていた。

「……何をしているのかな?」

「」の問いに彼女は。

「妾か? 妾はシークスと駆け落ち中じや」

どこか的外れな答えを返してきた

(そういうことを聞いたわけではないのですが……)

「なんですか! 御主人様をじろじろ見て!」

「なんじや! 使用人風情が!」

黙つていると、永久が怒り出して、少女と口論を始めた。
さて、どうやって收拾しようか?

そう考えていたところに、一人の青年が走ってきた。

「お~い! シルフィ~!」

「む、もう追いついたか」

少女 シルフィと言つらし は残念そうに呟いた。

「すいません、シルフィが迷惑をかけなかつたでしょ? か? 頭を下げながら、青年 シークス が訪ねた。

「いえ、特には。ところで駆け落ち中とお伺いしましたが? 少し気になつたので、聞いてみることにした。

「そうじや、一度、昼の世界を見てみたくての、シークスに頼んで、屋敷から抜け出したのじや」

「それは、駆け落ちではなく、ただの脱走なのではないですか?」

永久が、昼の世界云々にはふれずに、訪ねる。

「む、そつかもしれぬの」

なにやら、あつたりと認めてしまった。

「まあ、それはどうでもよい、父上は私が白子であると言つだけで、日中ずっと、窓もない部屋に閉じこめておるのじや」

「夜はちゃんと、護衛付きで外出しているんですけどね」

シルフィイの言葉をシークスが補足する。

……ちなみに、白子 アルビノ が、あまり日光に当たらな
い方がよいというのは事実である、メラニン色素がないため、皮膚
ガンになる確率が、常人の比ではない。

この世界には、UVカットクリーム等もないため、彼女の父の対
応は（たとえ体面を気にした結果だとしても）悪くないとは思うの
だが……。

しかし、だからといって、納得できるものでもないのだろう。

このことを伝えると。

「ふむ、そういう理由じゃつたのか。とにかく、ゆーぶいかつとく
りーむとは、なんじや？」

……この世界には、有りませんからね……。

「先ほど言つたように、この世界には存在しないものなのですが、
皮膚に有害な、紫外線を防ぐためのクリームです。

……これです」

そういうて、懐から、UVカットクリーム～150%カット～
吸血鬼用～～を取り出した。

「これが有れば、直射日光に当たつても、お肌がひりひりしません！

……少しぬるぬるしますけど……」

なぜか、永久が胸を張つて、力説する。

「それは、便利そつじやな！」

紫外線で苦労していたのだろう、あまりにも、日を輝かせている
ので。

「よろしければ、1ダースほど、差し上げましょ～

そう言いながら、更に11個ほど取り出す。

「本當か！」

シルフィイがうれしそうに言つ。

「ありがとうござります、えーと

そういえば、まだ彼らに、名前を教えていなかつた。

「まだ、名前を教えていませんでしたね。

私はルーツ、この子は永久です」

「この辺りでは、あまり聽かない、お名前ですね。遠くの方から、お越しですか？」

「ええ、東の方から」

このシーケスの問いは 悪いとは思つたが 「ごまかさせてもらつた。いくら何でも、異世界から來たとは、言えない。

」の後、しばらく世間話をして彼らと別れると……。

「もう、太陽が昇りますね」

赤く染まり始めた空を、見上げながら、永久が言つた。

「すっかり話し込んでしまいましたからね、

持つてきた、UVカットクリームは、勢いで全部シルフィイにあげてしましましたから、一旦、宿に戻りましょうか？」

「はい そうしましょう」

私たちは、宿でへばっていた黒騎士を拾い、この街を後にした。

淡雪の姫（2）

シルフィイたちと別れしばらくたつたある日の朝、田を覚ますと首に違和感があった。

意識をそちらにやると、メイド服の少女 永久 が頸動脈に牙を立てたまま眠っていた。

昨晩、永久に血をすわせていくことにそのまま眠ってしまったことを思い出した。

起こそうか？とも考えたが、幸せそうに眠っていたのでもうしばらくその寝顔を鑑賞することにした。

永久は、ダンピール（人間と吸血鬼のハーフ）であるため、真性の吸血鬼程ではないがある程度の吸血衝動がある。そのため、毎晩私の血を吸わせている。

……もっとも、毎日吸う必要もないのだが……。

「ふみゅ～」

しばらく、寝顔を眺めていると、永久が、目を覚ました。

そして、つい先ほどまで、私の首に、牙を立てていたことに、気づくと。

「す、すいません！」

あわてて、体を離して。

「そう言えば、今、どこに向かっているんですか？」
話題を変えるように、訪ねてきた。

「今更ですね、別に構いませんが。我々が、向かっているのは、グラシアと言つ、地方都市です。小さな街ですが、白い鷺鳥亭の鷺鳥の蒸し焼きは、絶品らしいですよ」

「それは楽しみですね」

「ええ、本当に」

「 そこの馬車、止まれ！」

太陽が、中天にさしかかった頃、馬車の外から、声が聞こえた。

「 はつ、はじつつ！」

黒騎士が、条件反射で馬車を止めてしまつ。

「 何か、あつたのでしうつか？」

永久が、声に、不安をにじませながら聴いてきた。

「 解りません、まずは、外に出てみましょう」

「 はい……」

外に出てみると、20人ほどの、鎧を着た男達が、立っていた。立派な装備をしていたので、少なくとも、山賊と言つことはなさそうである。

「 ギヤーッ！ 血つ！ 血がつ！」

……忘れてた……。

つい先ほどまで、永久に、血を吸わせていたため、私の首からは、未だに大量の血液が、流れ続けていた。

「 す、すいません！」

永久が謝った。

彼らとしては、意味不明だらうが……。

「 ああ、すいません、今治しましょう」

彼らを、納得させられる言葉が、見つからなかつたので、とりあえずは傷を治すことにした。

「 生と死を司りし王よ、我が傷を癒せ」

呪文を唱えると、傷は、たちどころに消えた。

もつとも、傷をふさぐまでに、流れ出た血はそのままなので、あまり見た目は、あまり変わっていない。

「 なんの、ご用でしようかな？」

「 あ、ああ、我々は、グライア領主グノーシス伯爵に使える騎士だ、

「

私の言葉に、多少は、理性を取り戻したのか、彼らは、語り始めた。

「我々は、グノーシス伯の命で、2日前、駆け落ちした、グノーシス伯の息女、シルフィード＝グノーシス嬢と、その護衛をしていました、シーケスという、騎士を追っているのだ。よつて、馬車の中を改めさせていただきたいのだが」

「構いませんよ」

そう言つて、私は、彼らを馬車の中に招き入れた。

5分後……

「……怪しい物は、多々ありましたが……、シルフィード様に関係のありそうなものは、一切ありませんでした。よい旅を」
隊長らしき男が、げつそりした顔で、そう告げて、足早に立ち去つた。

さて、何を見たのだろうねえ？

「ねえ、御主人様」

鎧の一団が、見えなくなつたところで、永久が、口を開いた。

「あの人たちが、言つていたのつて、シルフィ達のことでしょうか？」

「そうでしょうね、念のため、彼らの記憶を、読ませていただいたので、間違いないでしょ？」「

私が、そう答えると。

「よかつたんですか？教えてあげなくて？」

「その方が、面白そうだったので」

「なるほど、あんまりすぐに見つかると、盛り上がりませんからね

」

「はい、それよりも、グライアに行くついでに、シルフィの両親に、会つてみませんか？」

「それは、いいですね、どんな人でしょうか?」「うーん、どんな人なんでしょうねえ?」

と、ここで一旦、言葉を切り。

「ところで、来ましたよ」

私が、ある人物の、来訪を告げると。

「そういえば、そろそろ来る頃ですね……」

……そう言えば、永久は、彼のことが、嫌いでしたね……。

「今回は、どうするんですか?」

「特に、必要ないので、すぐに帰つてもらいます」

「そう答えると。

「はい」

永久は、嬉しそうに、そう言った。

うーん、彼も、相当嫌われていますね~。

そのとき、窓の外から、大声が、飛び込んできた。

「見つけたぞ!魔王協会会長ルーツ=エンブリオ=ヘルロード=タンタロス13世!!!」

……彼は、カイル。

いわゆる、勇者という奴です。

私が、行く先々に現れて、(私の長い、フルネームを呼んだ上で)
、戦いを挑んでくる、困った人です。

「さあ!出てこい!ルーツ=エンブリオ=ヘルロード=タンタロス
13世!!!今日こそこそ、貴様を滅ぼしてやる!!!」

カイルが、馬車に剣を向けながら、言い放った。

……どうでも良いが、毎回、一撃で吹き飛ばされているのに、なぜ、あんなにも、自信に満ちあふれているのだろう?

まあ、それはさておき、このまま座して滅ぼされるわけにもいかないので、窓から身を乗り出して、呪文を唱える。

「風よ、我が命に従い、彼の者に裁きを下せよ」

「ギャーッ!」

腐つても勇者と言つことが、一般人ならぼろ雑巾となる攻撃を、地の果てまで吹き飛ばされるだけで耐え抜いた。

「まあ、今回、彼の出番は、これで終わりなんですけどね」「彼、なんのために出てきたんですか？」

「今回は、顔見せです。これからも、毎回のよつこ出でますよ」「殺さないんですか？」

「彼は彼で、面白いですからね。まあ、永久がどうしても、といつのであれば殺しますが」

「うーん、『主人様がそう言つなら、今のところはいいです』

「そうですか、なんだか読者への説明っぽくなつてしましましたが、まあ、いいでしょ？」

「この小説の特徴ですからね」

「はい、ではそろそろ出発いたしましょうか」「はい

あ、首筋の血はお拭きいたしましょつか？」

「まだついたままでしたね、お願ひします」

こうして、私たちは、再びグラシアに向けて出発した。

淡雪の姫（3）

「グライアが見えましたよ！」

今日はちょうどいい曇り空だったので、永久と一人、馬車の幌の上に座つて景色を眺めていた。

馬車が時速80キロで走つていたためか、すれ違う人々に奇異の目で見られたが……永久の笑顔が見られたのだから、そんなことは些細なことだらう。

前回、何の脈絡もなく現れたカイルを退けた後は特に変わったこともなく、グライアの近くまでたどり着けた。

まあ、シルフィを探す騎士や、山賊には何度も遭遇したが、まあこれはどうでもいい。

その後、約一時間でグライアにたどり着いた。

すぐに白い鷺鳥亭に宿を取り、馬を厩舎に預け 肉食である事を伝えると怪訝な顔をされた まずは評判の鷺鳥の蒸し焼きを頼んでみた。

「作るのに十時間ぐらいかかるそうですよ……、先に伯爵に会つてきましょうか」

「それは仕方ありませんね、……楽しみにしてたのに」

「無理やり早く作らせましょうか？」

「それをすると、あの人はどうなるんですか？」

私の言葉の中にどこか剣呑なものを感じたのだろうか、永久はそんなことを聞いた。

ちなみに実行して時の流れを速めた場合、局地的とはいえ時空を歪めるわけだから、歪みが物理現象に転化すればこの街は跡形もなく消え去り、例えそなならなかつたとしても、他の時間軸とつなが

つて原始人や恐竜のようなものが出てこないとも限らない。

と言え、私ならそのようなミスをするようなことはほほもないし、

例え起こったとしても用意に処理できる。

彼女が言いたいのはそのようなことではなく、蒸し焼きを作ってくれる宿のおじいさんのことだろう、彼は一瞬で十時間分の加齢と疲労を行なうことになる、十時間ばかり年をとつたところはどうとあるまいか、時間を使速した場合、一瞬認識が遅れ一気に疲労することがよくある。

あの、おじいさんの体力にもよるが、見た目道理ならおそらく死亡するだろう。

「死んじゃうならやめて下さいね

「では、止めておきましょうか」

「はい」

結局、先に伯爵の元へ行くことになった。

「伯爵に会つ前に、街を散策しませんか？」

宿を出たところで、永久が提案した。

「それもそうですね」

今日は生憎の曇り空だが、街は活気に満ちていた。

「あ、あの鳥おいしそうです、御主人様買つて下さい」

「いいですよ、……でも、たぶんあれ食用じゃありませんよ？」

永久は、ペットショップの鳥を指して美味しそうと言つていた。

「あつ！」

今、気づいたらしい。

「じゃあ、死んじゃうまで飼いますよ」

「そして、その後食べるんですか」

「はい」

永久は満面の笑みで答えた。

……私は育て方を間違えたのかかもしれない、魔界だけでなくもつと他の世界も見せるべきだつたか……。

「毎度あり！」

「ありがとうございます」 大切にしますね 「

あれ、そう言えばあの鳥つて……。

「死んだら美味しく食べてあげますね」

「アリガトウ、アリガトウ」

「ああ、やつぱり……」

理解してないでしようがそこでそれはまずいですよ……。

あ、ほら、店主が閉店の看板を持つてきました。

「まあ、いいか。

「そろそろ伯爵のところに行きましょう、御主人様

「え、ええ、そろそろ行きましょうか

「大丈夫ですか？御主人様？」

「いえ、何でもありません、さあ、行きましょう！」

「はい」

「止まれ！何者だ！」

屋敷の前に行くと門番に止められてしまつた、まあ、素直に名乗ることしましよう。

「我々は旅の者です、私は、ルーツ＝エンブリオ＝ヘルロード＝タンタロス13世、ルーツと呼んで下さい、この子は永久、領主にお取り次ぎ願いたい

「しばし待たれよ」

そう言つて屋敷の中へ入つていつた。

「どうでも良いんですが、代わりの人を置かずに持ち場を離れてもいいんでしようか？どう思います、御主人様？」

「私なら首にしますね」

「大丈夫でしょうか……」

彼の行く末はどうでも良いので置いて置くとして、十分ほどで彼は戻つて來た。

「伯爵は御会いになられるそうだ、私に付いてきて貰おう。」

「わかりました」

彼の後ろに付いて屋敷に入つてゆく。

「連れてまいりました！」

「よろしい、下がつておれ

「はつ！」

伯爵の言葉に従い、彼が部屋を出た後に。

「……奴は首だな」

伯爵はつぶやき。

「さて諸君、シルフィの様子はどうだったかね

「なかなかに御元氣そうでしたよ

「ほう、それは何よりだ」

「あの、何で伯爵が知っているんですか？御主人様？」

なぜか自然に進んだ会話に、最もな疑問を投げかけたのは、永久

だった。

「親バカのなせる業じゃ

と、これを答えたのは伯爵。

「カイルが私達を見つけるのと同じですよ

「なるほど、分かりました」

ここで伯爵に向き直り。

「騎士団が必死に探しているのに、貴方はなぜそんなにも落ち着いているのか教えていただきたい

「ふむ、この辺りで誰かに話すのもよいかも知れん、少し長くなるがまわんかね？」

「どうぞ、御話下さい」

「さうか、では始めるぞ」

あれは、寒い冬の日じゅつた。

四十路を超えてはじめて授かった子供じゅつたから、わしも興奮しておつた。

生まれてきた子供が真つ白じゅつた時は驚いたが、すぐに愛おしさがこみ上げてきたわい。

産婆が白子じゅから太陽に当てるな、とか言つておつたから、いろいろ調べてみたんじゅ。

結局、僕はいつも閉じ込めて置くような事になつてしまつたから、かわいそつに思つておつたんじゅ。

少しくらいスリルが有つたほうが良かるうと思つて騎士団を出したりはしたが、今回のことも何かの息抜きになれば良いと思つておる。

帰つてきて何かあつた時のために、世界中から一流の医師を集めである。

「と、まあそんな訳でそこまで心配もしておらん、シーケスも居るしな」「なるほど」

」の後、しばらく伯爵と談笑した（話題は一転二転し最後には魔術による神の創造が話題になつていた）。

「ふむ、古い時代にはそのようなことも試みられておつたのか……」「では、我々はそろそろ宿に戻ります」

「もう帰つてしまふのか、まあ良い、また近くに来た時には寄つて行くといい、歓迎しようだ」

「ありがたいお言葉感謝します、それでは」「つむ、また来るとよいぞ」

「さよなら」「

……そういえば今回ほとんど喋らなかつた永久ですが、ずっと

例の鳥に話しかけていました、名前はジー君に決まったようです。

「永久、宿に戻る前にこの街の支部に来りますよ」

「はい？ 構いませんが、何か用でもあるんですか？」

「伯爵は、医師団を用意していると言つていましたが、皮膚ガンになつた場合、この世界の医療レベルで対応することは難しいと思うので、対応できるよう手を打つておきます」

「はい 分かりました」

「すいませんね」

「ううして、魔王協会の支部によつて話を通しておいた。

「これは余談になるが、この後、宿で食べた鶯鳥の蒸し焼きはとても美味しかつた。」

「おいしいです」

「十時間も待つた甲斐がありましたね」

「はい」

淡雪の姫（4）

翌日、グラシアを出て次の村に向かう道すがら。

「次はどこに向かうんですか？」

「ユリルという小さな村です、あそこにはこの世界の魔王協会支部をまとめる大きな支部があるので、そこで準備をして次の世界へ向かおうと思うんですが、この世界にやり残した事はもうありませんでしたよね？」

「シルフィイ達の事は良いんですか？」

「…………」

「あの、もしかして忘れてましたか？ 御主人様？」

「ええ、すっかり忘れていました、一段落着くまで見守ることにしますようか？」

「はい」

「オイシイ、オイシイ、オニクダヨー」
ピ一君……

「…………」

「世界よ、その真の姿を我が前に示せ」 へへへへ

私の言葉に従い、世界はその全てを私の前にさらけ出した。

「どうです？ シルフィイ達の場所は分かりましたか？」

「ええ、どうやらユリルむらに向かっているようですね」

「分かりました このままユリル村に向かいましょう」

その日の夕方、村に入った私達は魔王協会の支部に向かった。

「お久しぶりです会長、永久様、相変わらず仲睦まじいようで何よりです、そもそも愛とは相互への絶対的な依存であり……」

出迎えに来た支部長は、私達の顔を見るなり挨拶もそこそこに愛

について語り始めてしまった。

こうなると余程のことがない限り話し続ける。

それにも……依存、ですか、確かにこの子と会つ前はずいぶん不安定でしたね。

私はクスリと笑つた。

「どうしましたか？ 御主人様？」

「いえ、何でもありませんよ」

そう言って永久の頭を撫でた。

「ふみゅ～」

永久は目を閉じて幸せそうな声を上げた。

「故にエロスとアガペーは表裏一体の物であります……」

「オニク、オニク、ランランラン……」

……。

もう少し感傷に浸らせてくくれても良いと思つんですが……。

「明日の夜、村の収穫祭がありますで、御一方も楽しまれると良いでしょ？」

いつの間にか支部長の話は終わっていたらしい、収穫祭ですか……。

……。

「楽しみですね 御主人様」

「そう言えばシルフイ達はいつ頃着きますか？」

「そうですね、このペースなら明日の朝方頃でしじつか」

「一緒にお祭り回りますね」

「ええ、楽しみですね」

「」の後、馬車や黒騎士を職員に任せ、エレベーターに乗り最上階のスイートルームへ向かった。

ちなみに、この魔王協会ユリル村支部の建物は地上五十階のビルであり、このファンタジーの世界に、しかも小さな村にある事はかなり不自然である。

魔王協会は

「未開世界の健全発達に関する条約」には調印していないとは言え、いくら何でももう少し考えた方が良いと私でも思う。しかし、このよつたな支部は他にも多数存在するため、対応が難しいのが現状である。

それはさておき。

今、私は窓から村を眺めながら、永久に血液を吸われていた。

「ところで御主人様？」

「何です？」

永久が一旦吸血をやめて尋ねてきた。

「いつも思い切り噛みついでますけど、痛くありませんか？」

「まあ、確かに少し痛いですが、吸血鬼の吸血行為は血を吸われる側に強い性的快楽をもたらすので、ほとんど気になりませんね」

この事を告げると、少し頬を赤く染めて。

「そ、そ、その、もしかして、何時もむらむらしてたとかありませんよね？」

「実は少し……」

永久は真っ赤になつてうつむいてしまい、ぱつりと。

「あ、あの、襲いたかつたら襲つていただいてかまいませんから……」

そう言つた後は、再び膝の上に乗り吸血を再開した。

……これは誘われているんでしょうか？

この後、襲つたのかどうかは書きません。

翌朝、微睡みに身を任せていると。

「……しゅ……さま、ごしゅ……んさま、御主人様」

なぜか浴衣に身を包んだ、永久に起こされた。

「おはよう、こんな朝早くから、何かありましたか？」

「はい、シルフィイ達が追つ手と戦っています！」

窓から村の外を見ると、確かにシークスが一人で百五十人ほどの騎士を相手に戦っていた。

中には弓兵や魔術師も混ざつているらしく、シークスに勝ち田はほぼ無いだろう。

「シルフィイ達の冒険はここで終わりですか」

「そうだと思います。お祭り一緒に回りたかったな……」

「私が騎士団を追い払いましょうか?」

「あ、そこまでしてもらわなくとも良いです。ただし少し残念だなって思つただけですから」

「なら構いませんが……、ん?」

騎士団の「兵達がシークスを狙つて一斉に矢を放つた、そして、なんとそれを観ていたシルフィイが、騎士団とシークスの間に飛び出したのである。

シルフィイに突き刺さる無数の矢。

かばわれたシークスも、矢を放つた騎士達も戦意を喪つて呆然としている。

「まさかここまでやるとは思いませんでした……」

シルフィイに刺さった矢は少なく見積もつても二十本、頭部や胸にも刺さつてるので、たとえ魔術を使つたとしても、この世界の技術で蘇生させることは不可能だろう。

「あの、御主人様……」

「分かつてします、ちゃんと助けてますよ」

「はい ありがとうございます あ、パジャマのままじゃ何ですかから御着替え手伝いますね 」

なぜか浴衣に着替えました、この世界でこの格好だと少し問題になるんですが……。

まあ、この村なら今更か。

「うう、シルフィ……」

「…………」

下に転移してみると、案の定重い空気が漂っていた。

「シルフィ嬢を救いたいですか?」

私の唐突な問いかけに対し、彼らは。

「シルフィを助けられるなら何でもします! ですから、どうかシリフイを助けて下さい!」

「当然だ! シルフィード様は私の太陽! 我が身をなげうつことに何の躊躇いもない!」

……ちなみに後のは騎士団長です、この後延々と愚痴を言い続けていますが、どうやらシルフィを偏愛していたようで、シルフィを連れ出したシークスを逆恨みしてあのような指令を出したようですね、それは良いでしょう。

「分かりました、しかし魔王にの願いを叶えてもらいたければ何かの代償が必要です、さて……」

「我が命、シルフィード様のためなら惜しくなど無い!」

この騎士団長、カイルと同じタイプだ……。

まあ、良いか……。

「代償は……あなたの死後の魂でいかがですか?」

私はシークスの方を見ながら告げた。

「分かった、それでシルフィイが助かるなら魂でも何でもくれてやるでは、この契約書にサインを……」

「おい! 僕は無視か!」

騎士団長つるさい……。

「はい、これでかまいせん」

シークスのサインを確認した私は呪文の詠唱を開始した。

「…………」

「生と死を司りし王よ、最後の聖王にして魔王協会の盟主たる我、ルーツ=エンブリオ=ヘルロード=タンタロス13世の名と権勢において命ずる、シルフィード=グノーシスの魂をこの世界に存在さ

せたまえよ」 ハーハーハ

「ん？ どうしたのじゃ、シークス？ そんな泣きそうな顔をして
？ なつー、抱きつくな無礼者！」

「これで、大丈夫そうですね」

「はい」

「我々は一人の邪魔にならないように、出店の準備でも手伝いに行
きましょうか？」

「はい」

「この日の夜。

「あ、御主人様、あれ欲しいです」

そう言って永久が指し示したのは、射的の景品になつていて巨大
な熊のぬいぐるみだつた。

あの大きさなら、取れないこともないか。

「分かりました。一回分お願ひします」

そう言って夜店の主に十ゴールド渡した。

「あいよー！」

その後、一発で特賞の景品であつた熊のぬいぐるみを落として射
的屋の店主に呆然とされたり、永久と一緒に夜店の焼きそばや、リ
ンゴ飴を食べながら歩いたり、金魚すくいの金魚を全て取つてしま
つたりしながら祭りの夜は更けていった……。

「あの後、私を救つてくれたのは御主だつたそつじやな、礼を言つ
ぞ」

「いえ、あれも魔王としての仕事ですから
ここでシークスが口を挟んで」

「そう言えば、あのときは動転していて気にならなかつたんですが、

魔王とか言ってませんでしたか？」「

「はい、私が魔王協会会長ルーツ＝エンブリオ＝ヘルロード＝タンタロス13世ですよ？信じられないというなり……」

「山でも消し飛ばしましょうか？」と言おうとしたところ

「いえ、信じてはいます。ただ、魂つて……」

「死んだ後で構いませんよ」

ちなみに、これは永久。

「まあ、当分先ですよ。それでは、私たちは次の世界へ向かうことになります。その仲を裂くのが私とは言え、せめて死が一人を分かつまでは幸せであることを願っていますよ」

あの後、二人は婚約することになった、自らの魂を捧げてまでシリフィを救つたことが決め手になつたらしい。

まあ、結婚式には招待してくれるそつなので、楽しみにしていましょう。

その日の晩、ゴリル村支部のゲートを使い、私たちはこの世界を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7789d/>

淡雪の姫

2010年10月8日15時30分発行